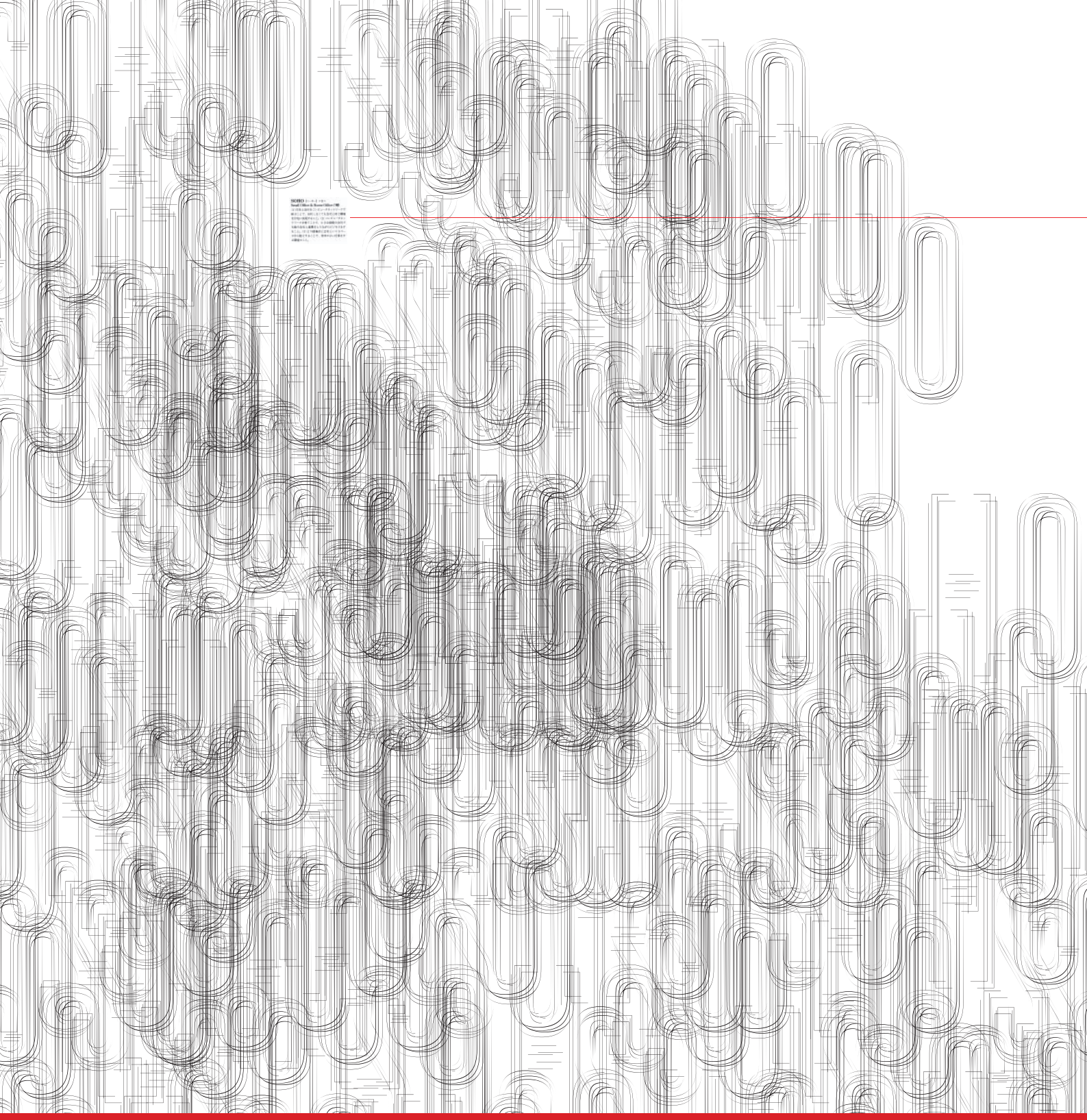


『SOHO』という言葉を聞いたことがあるだろうか？
米国ではすでにビジネス誌でも紹介されている、新しい仕事のスタイルを表す語である。
今年の7月に幕張メッセで開催されたコンピュータネットワーク最大のイベント「ネットワールド＋インターロップ」
の会場でも『SOHO用ハードウェア』なるカテゴリの製品が登場してきた。
そして、話題沸騰のオペレーティングシステムであるウィンドウズ95など、
SOHOを意識したオペレーティングシステムまでも登場してきたのだ。
それではこの『SOHO』とはなんなのだろうか？すでにSOHOを実践している人の事例をはじめ、
実現するためのハードウェア、ソフトウェアを紹介しながら、『SOHO』のコンセプトに迫っていこう。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

SOHO【ソーホー】<名>
Small Office & Home Officeの略
(1)自宅と会社をコンピュータネットワークで結ぶことで、出社しなくても会社と同じ環境を自宅に実現すること。(2)コンピュータネットワークを使うことで、小さな規模の会社でも他の会社と連携をとりながらビジネスをすること。(3)より積極的に会社というスペースから独立することで、効率のよい仕事をする環境のこと。

特集

スモールオフィス&ホームオフィス推進計画

もうそこまできている、夢のパーソナルオフィス

インターネットマガジン編集部 編
●執筆協力　今泉 洋(本誌シニアコラムニスト) 井上尚司(本誌アドバイザースタッフ) 山田祥平(フリーライター)

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

SOHO small office & home office

コンピュータネットワークは

新しいワークスタイルをも生み出した!

新しい仕事のキーワードSOHO登場!

「SOHO（ソーホー）」と聞いて、「ああマンハッタンの、アーティストのロフトがある地域のことね」というのは80年代から抜け出ていない人のセリフ。90年代の「SOHO」とは「Small Office/Home Office」の頭文字をとった、文字通り少人数のオフィスあるいは自宅におかれたオフィスのことだ。

●SOHO？

この言葉が初めて米国のメディアに登場したのは2年ほど前。93年の末にBusiness Week誌とPC World誌が相次いで「SOHO広告特集」を組んだことに始まる。当時のPC World誌は「1996年には全米で販売されるPCの55％がSOHOマーケットで吸収され、この売り上げは155億ドル以上になる。SOHOマーケットを獲得することは、情報関連企業にとって非常に重要な課題になる」と予測している。両誌が翌年にも４回にわたって広告特集を組んだことからも当時、いかにコンピュータ、通信、オフィス機器などのメーカーが新しい市場としてSOHOに期待していたかが分かる。

それから2年。コンピュータやモデム、携帯電話、FAXなどの低価格化と高機能化、インターネットの普及や通信料金の値下げ競争などによって、米国ではさらにSOHO化の流れが加速しているという。

民間調査機関の調べによれば、現在米国では4110万人以上もの人々が何らかの形で家庭のオフィスで仕事をしている（自宅勤務という形をとっている企業従業員がおよそ760万人、自宅で自営業を営む者が2430万人、会社終業後に何らかのサイドジョブを持って家庭で働く者920万人）。また、95年末には全米家庭の44％、4300万人がホームオフィスでサイドジョブや事業をすることになるという予想もある。

●サテライトオフィスとどう違う

日本でもかつてオフィスのスタイルを変えようという動きが見られた時期があった。「サテライトオフィス」あるいは「リモートオフィス」という構想だ。

都心のオフィス家賃の高騰に耐えかねた企業が都心を離れた場所にオフィスを設け、通信回線で本社とリンクする。一方、社員は職住接近で通勤地獄から解放されるという一石二鳥の目論見だった。しかし「常に顔を合わせていないと仕事にならない」という日本のスタイルがこうした環境に馴染まず、芳しい成果を上げられなかったようだ。

一方、米国の企業はこれを一気に飛び越えて（？）、テレコミューティングやワーキング・フロム・ホームという方向に動いた。レイオフなど経営の合理化が一段落した後、AT&T、Holiday Inn、IBMといった大企業は、従業員にホームオフィスで働くことを奨励し始めたのである。こうした背景には、90年の空気浄化法による単身自動車通勤の規制や社有駐車施設制限への対応、ワークフォースを確保しながら大規模なオフィス設備のオーバーヘッドを減らしたいという企業の考えがあったようだ。

オフィス作業に必要な機器の値下り・機能の向上と廉価な通信環境の普及がホームオフィス開設の費用を劇的に引き下げる。一方で企業は合理化策としてのテレコミューティングを奨励。その結果、より多くの従業員がホームオフィスで快適に働けるようになり、同時に企業は高い生産性を手にする、という相乗的な関係ができあがっていく。これに加えて、レイオフされた何千もの独エクゼクティブたちが独立コンサルタントやブローカー、財務アドバイザーとして新しい人生を歩み始めたこともSOHO化の流れを加速したものと思われる。

●モバイルコンピューティングとどう違う

最近注目されているキーワードの1つに、ラップトップコンピュータやPDAを使う「モバイルコンピューティング」というものがある。ワーキングスタイルという視点からとらえると移動オフィスということになるかもしれない。だが、これはSOHOというよりも、現場のセールス担当と本社機能の連携強化という側面が強い。

これに対してSOHOは、小さなオフィスや家庭の中に、高い知的生産性を求められる作業やクリエイティブワーク、あるいは事務処理を行うオフィスとしての「場」をきちんと作り上げてしまうものだ。

SOHOのガイドブックや解説記事では、来客用のセカンドベッドルームや地下室などを改装してワークエリアを作ることを勧めている。米国では住宅を購入した後、自分でこつこつと手を入れて不動産価値を上げて売却するということがよく行われるが、こうした設備が高く査定されることも多くなっているという。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

●新しいワーキングスタイルとしてのSOHO

アメリカは今、ワーキングスタイルの大きな変革期にある。80年代に仕事中毒・上昇志向といわれた世代が、ミーイズムから家庭志向に転向し、自分の才能を活かして充実した生活を送ろうとしている。21世紀に向かって、そうしたライフスタイル実現の場としてのホームオフィスは着実に増加するだろう、と言われている。

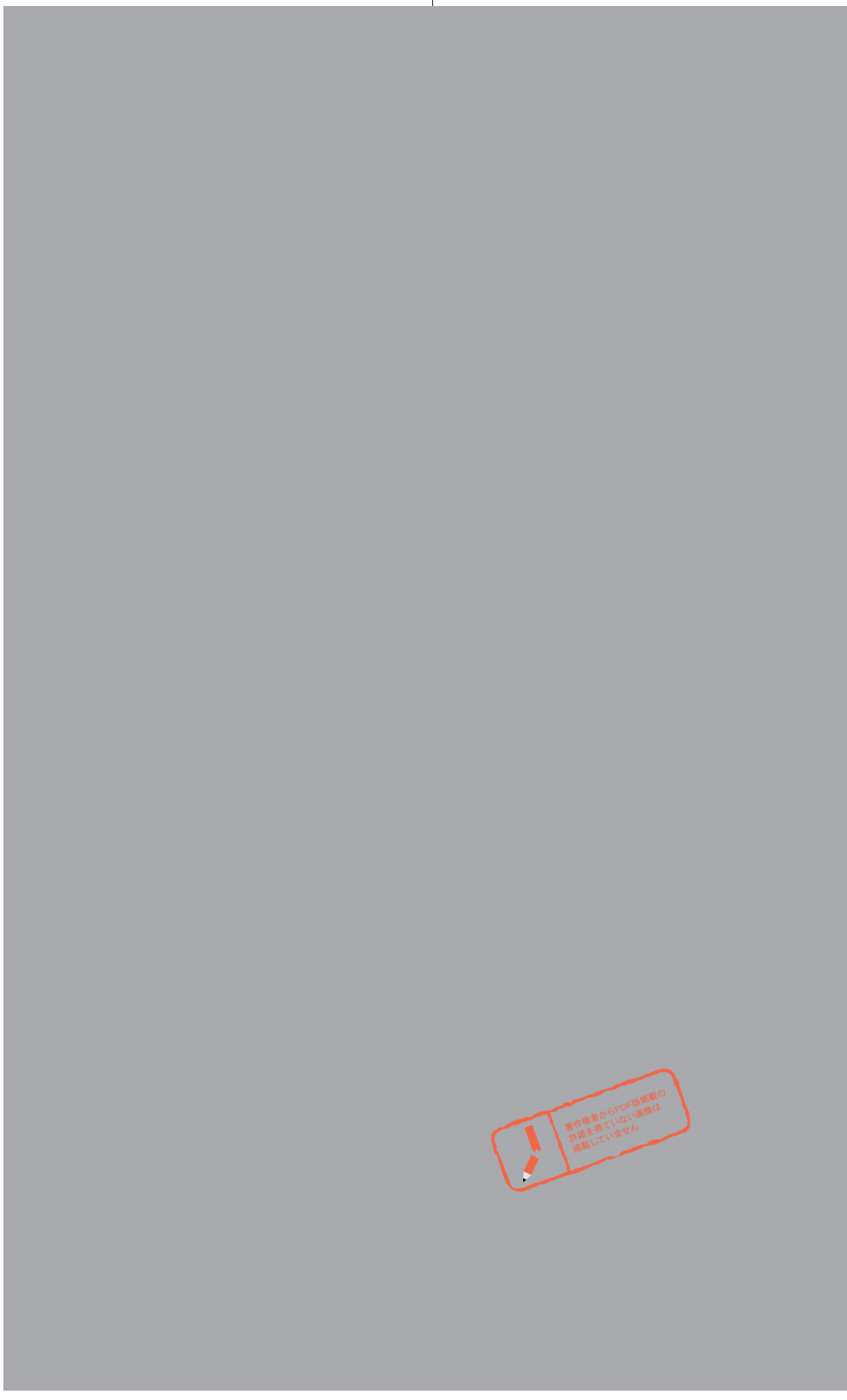
考えてみると、ホームオフィスにはたくさんメリットがあることに気づく。仕事にかかるまえに体力と精神力を消耗させる通勤時間はゼロ。カジュアルな服装で楽に仕事ができる。もし本当に仕事として要求されるものが知的生産性であれば、これほど余計なストレスのかからないワーキングスタイルはない。

しかし実際のところ、SOHOの快適さは仕事に対する責任の大きさの裏返しでもある。会社勤めでは集団の中に隠してしまえる責任が、すべて自分1人にかかってくる。ホームオフィスを効率的に運営しようとすると、きちんとした時間管理や計画が必要になる。自己管理を徹底するしかないのだ。

日本の劣悪な住環境では、独力で米国のようなホームオフィスを実現するのは難しいかもしれない（もう一方の劣悪な環境、通勤事情やオフィス環境を考えると、企業のSOHO化推進は不可避だとも思えるのだが……）。しかし、パソコンなどの情報機器とインターネットのような情報チャンネルを組み合わせて使えば、これまで大企業でしかできなかったことが、小さなオフィスあるいはホームオフィスでも可能になる。

かつてであれば、生活の安定と引き換えに嫌々ながら企業勤めを続けるのも方便だったかも知れないが、会社はいつまで身分を保証してくれるか分からなくなってきた。

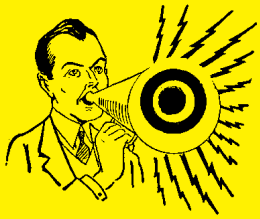
何か本当にやりたいことがあるなら、自分一人で、あるいは仲間と一緒に、それをスタートするための舞台装置は揃いつつある。それがSOHOなのだ。



インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

特集を読むまえに・・・あなたはSOHOに向いているか？！

【SOHO必要度チェック】



●あてはまるものに✔をつけてください（結果はこのページの下に書いてあります）。

- ☑ インターネットマガジンを読んでいる
- ☐ 自分のことは自分でやるタイプだ
- ☐ 満員電車はイヤだ
- ☐ 通勤時間がもったいないと思う
- ☐ 自分の時間を大事にしたいと思っている
- ☐ 好奇心の強いほうだ
- ☐ 休みにはきちんと自分のやりたいことをやる
- ☐ 長時間の会議は無駄だと思う
- ☐ 電話料金はあまり気にしない／通信費をかなり使うほうだ
- ☐ オフィスのレイアウトなど、ついつい口を出してしまう
- ☐ ファイル整理は得意だ
- ☐ 自分でも明るい性格だと思う
- ☐ 自宅に好きに使える部屋がある
- ☐ 文書表現はうまい方だ（伝言を文書にするのに苦労しない）
- ☐ どうせ仕事するなら快適にやりたいと常に思っている
- ☐ 会社はネットワーキングに関して理解がある方だ
- ☐ 仕事は事務系だ
- ☐ 打ち合わせより自分１人で仕事をすることが多い
- ☐ アイディアが勝負のビジネスをやっている
- ☐ 会社に自分の辞書などを持ってきている
- ☐ 共稼ぎで、昼間はだれも家にいない
- ☐ 職業はフリーランスだ
- ☐ 複数の企業と契約をしている、あるいは常に複数の企業から依頼がある
- ☐ 仕事でワープロあるいはパソコンを頻繁に使っている
- ☐ 仕事や趣味でFAXやパソコン通信、インターネットなどを使っている
- ☐ 仕事の打ち合わせは電話か電子メールでしてしまうことが多い
- ☐ ニュース番組は必ず見る
- ☐ 好きな仕事をやっていると思う
- ☐ 日曜日に、ふと会社のマシンのファイルが気になってしまう
- ☐ ついつい思い付いたことをメモするクセがある
- ☐ もう大部屋制度を採用する企業は時代遅れだと思っている
- ☐ 少し会社から離れたほうが客観的に考えられると思う
- ☐ 会議のまとめがうまく、議事録作成をまかされることが多い
- ☐ 新しい電子文具が出ると、必ずチェックしてみる
- ☐ 会社を辞めても結構やっていけそうな状態だ
- ☐ 会社員だが、時々物書きなどのアルバイトを頼まれる
- ☐ 音楽をかけていると仕事がはかどる
- ☐ 他人は他人。自分のペースでのんびりやるほうがいい
- ☐ いつかは自分のオフィスを持ちたいと思っている
- ☐ パソコンの設定は自分できる
- ☐ ソフトの使い方は他人に習わなくても自分でなんとかできる
- ☐ 会社は全館禁煙でストレスがたまる（自分は喫煙者）またはその逆
- ☐ 会社帰りには必ず仲間と飲まないと気がすまない質ではない
- ☐ いつも人と会っていなくても心配でない
- ☐ 子どもはいないので、邪魔されずに自宅でも仕事ができそうだ
- ☐ 仕事はテキパキとやってしまいたい
- ☐ 転職を考えたことがある
- ☐ セールスなど人と会う仕事ではない
- ☐ 製造のラインの仕事ではない
- ☐ 不景気だからこそ、なにかチャレンジしてみたい
- ☐ カミさんは専業主婦でない
- ☐ 会議が「仕事だ」っていう人は信じられない
- ☐ 仕事に明確な目的がある
- ☐ 部下がいなくても仕事ができる
- ☐ 上司に信用されていると思う
- ☐ 会社にはインターネットがある
- ☐ パソコンは清書マシンだと思わない

【あなたのSOHO度はコレだ！】

SOHO度テストの採点方法：質問に「イエス」と思うものにチェックしてください。チェック1つが1ポイントです。トータルのポイントがあなたのSOHO度です。計算したポイントはつぎのような意味です。

0点～10点：コテコテの会社人
あなたは旧来型の「会社」人ですね。せめてもの救いはコンピュータネットワークに興味を持っていること。これからはこうしたSOHO志向の人も現れてくるので、できるだけ広い心で見守ってあげる努力をしましょう。

11点～25点：SOHOには賛成、でも自分では...
あなた自身はSOHOに向いているとは言い難いですが、SOHOを志向している人への理解はかなりあると思われます。自ら実践するというよりは、SOHO志向の人をサポートしてあげてはどうでしょう。

26点～50点：SOHO予備軍
本当はSOHOしてみたいのに、本当に仕事ができるのだろうかと不安で、なかなか踏み出せないでいます。いまの仕事に満足していないなら、思いきってSOHOを検討してみましょう。きっとあなたの人生は大きく変わるかもしれません。

51点以上：もうSOHOなしでは生きられない人
よくいままで会社で仕事していましたね。きっと息苦しかったに違いありません。しかも効率も悪く、あなたの能力は十分活かしきれているとはとうてい言えない状況ですね。さぁ、この特集を読み終わったら、会社にさっそくSOHOを提案しましょう！

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

TELECOMMUTING

最も現実的なSOHO

テレコミューティングを考えてみた

……とは言ってみたものの、現実を考えるとどこから手をつけていいのか迷ってしまうのは事実。それにどうやらコンピュータやインターネットといった技術は単なる支援装置にすぎず、SOHO化を考えるうえでは他人や企業組織とどう折り合いをつけるかというノウハウのほうが重要なようだ。

●仕事がやってくる、その前に

テレコミューティングとは、日本語で平たく言えば在宅勤務。なんとなく暗いイメージを持つ人もいるだろうが、モノは考えようだ。頭を切り替えて「仕事をしに行くのではなく、自分のために仕事がわざわざ会社からやってくるのだ」と考えると、なんとなくスマートで楽しい感じになる？

しかし、自分と仕事の動きを入れ替えるということは、今までの仕事や他人とのかかわり方、仕事の進め方を根本から変えるということでもある。オフィスでの自分、の役割、全体の仕事の流れや方法、何がどう行われているか……これまで“あたりまえ”と思っていたことを改めて見直し、もし自分がテレコミューティングした場合、それがどう影響するのかを確認しておく必要がある。

これは結構大変な作業だ。しかし、「パソコンを入れなきゃ時代に遅れるっていうから、試しに1台入れてみるか」というようなノリでテレコミューティングを導入するわけにはいかない。パソコンなら埃をかぶるだけですむが、今回は一人の社員（しかも自分）の生活がかかってるのだから。

●お互いのメリットを考えてみる

まず考えなければならないのは、こうした制度を採用して自分と会社は何を実現しようとしているのか、ということだ。自分と会社の双方にメリットをもたらす関係を作るにはなにが必要だろう。少なくとも自分と会社の関係……自分はどういう業務を仕事とするのか、どの範囲で責任をもち、どういう役割を果たし、結果として何をもたらすことが期待されるのか……をはっきりさせておくことが必要不可欠だ。

一般に、社員にとってのテレコミューティングのメリットは、通勤時間が減少し、電話や同僚に仕事を邪魔されず、ストレスが減る。自分のコンディションに合わせて集中的に働くことができるため、結果として生産性が上がることだと言われる。

一方、会社が期待するメリットは（オフィス費用の削減もあるかもしれないが）、優れた人材採用のチャンス増大と、フレキシブルな配置転換による生産性の向上だ。

キーワードは「生産性」。だが、ここで問題になっている生産性とは、実は工業的なアウトプット量の多寡ではなく、極端に言えばリキんでいても出てこないひらめきとその定着率なのだ。考えてみれば、家に持ち込むのは工場ではなく、オフィスという知識編集の場……だからこそ快適性にこだわっているわけだ。

●「DOs and DON'Ts」リスト

社員にとって快適なテレコミューティングを阻むものは何だろう。

最大の不安は、同僚から隔離された孤独感におそわれることだろう。一緒にいないということで、インフォーマルな人間関係から切り離される。仕事上の刺激を同僚から受けにくくなり、視野が狭くなったり、機密保持義務が厳しくなってストレスが増えるかも知れない。監視する上司がいないため、自分に甘えてしまったり、逆にオーバーワークになる可能性もある。

一方、会社にとっての問題は、仕事の流れや管理方法を変えなければならず、規則が増加してしまうことだろう。

こうしたテレコミューター社員と会社の関係を円滑にとり結ぶためには、制度整備はもちろんだが、直接の上司や同僚の理解が重要になってくる。なんといっても、自分と会社のインターフェイスとなってくれるのは上司だし、自分がいないために苦労を背負い込んでしまうかもしれないのは同僚なのだから……。

そこでこのシステムを円滑に運用するために、それぞれ話し合って共通のルールをリストに作って確認しておこう。

管理者たる上司としては、その生産結果を重視する。すなわち態度の代わりに目標と結果を管理の重点項目とする。

また同僚はテレコミューター社員とコミュニケーションをよくとり、彼が組織の一員であることを思い起こさせるよう努力する。

テレコミューター社員は自律的な私生活を心掛け、ホームオフィスでの仕事をきちんとスケジュール管理して、上司への報告を怠らない。また、自分の仕事の世話を同僚等に期待せず、自分自身で設定した業務目標はきっちりと達成する。

まずは会社にテレコミューティングという制度を認めさせることが必要だ。しかし制度を硬直的にとらえるのではなく、関与者それぞれがこういった運用ポリシーを尊重し、いかに柔軟に運用していけるかが、この新しいワーキングスタイルを成功に導くカギになるのではないだろうか。

©1994-2007 Impress R&D

SOHOはアメリカ生まれの概念だ。いったい本場アメリカではどのようにSOHOが実践されているのだろうか？
いま話題の「パイプライン」というリモートルーターを開発し、日本での発売を開始したアセンド・コミュニケーションズ社のトップに、米国の様子と彼らの製品のセールスポイントについて伺った。

いま注目のSOHO用機器メーカー、
アセンド・コミュニケーションズ社に聞く

アメリカのSOHO事情

アセンド社について教えてください。

アセンド社は1989年に設立されました。設立に関わった者の1人はイーサネットのスペックを作った人間で、ゼロックスやDECにいました。そして、ターミナルアダプターの専門家でヘイズにいた人、モデムの専門家でやはりヘイズにいた人、それにIPのソフトウェアの専門家でした。このようにアセンド社はイーサネットとISDNについての技術者が作った会社なのです。

日本と違い、米国ではISDNの普及はいまひとつで、いきなりISDNの製品を中心に出せたわけではありません。最初はビデオ会議のシステムである「マルチバンド」というソフトを出したのです。テレコミュニケーション、つまり離れていても通信できるということを目指そうとしていたわけです。ですから、シスコとかベイネットワークなど、バックボーンのルーターのメーカーと競合するメーカーではありません。

アセンド社が目指すものは何ですか？

それは、電話ではなく、データでコミュニケーションできる機器を作りたかったのです。つまり、営業所など離れたところでも通信できるというものです。現在では、目指したマーケットが確実にあったなと思っています。そして、企業にデータでアクセスできるというので新しいビジネスを考えています。それに、現在アメリカにあるインターネットプロバイダーのうちの26社が当社の製品を使っています。

アセンドの製品、特にパイプライン25などは「SOHO（ソーホー）用機器」というところをウリにしていますが、「SOHO」とはどういうことなのですか？

神戸の震災でもそうでしたが、ロサンゼルスの震災でも、交通が分断されてオフィスに行けない人が出てきたわけです。モデムでアナログ接続をやっていたけど時間はかかるし、不安定さがつきまとうんですね。ISDNは信頼性が高いですし、SOHO実現の気運が高まったのです。

災害時以外でも、日常的には、大気汚染とか交通事情とかの問題があり、会社に一定のテレコミューターがいるという申請をすると、州政府が税法的な優遇措置をしてくれるのです。働いている女性の人など、子どもの問題があったりして、自宅でやったほうがいい人がいるわけです。もちろん、朝型の人、夜型の人など、会社に行って9時から5時まで働くというよりは、一定の責任を果たせばいいというわけです。そうすれば、生産性も高まってきますし、さきほどの税金の優遇の話もそうですけど、経営者としては駐車場をはじめとして、建物もこれ以上の人は通えないというくらいまで削減をしているんです。大気汚染が問題ですし、ハイウェイの問題を解決するのに、自宅でできるならそちらでやりましょうというようになってきています。私自身、自宅からやっている部分も多いです。

アセンド社では何人くらいの人が働いているのですか？そのうち何人がテレコミューターですか？

急成長しているので正確にはいいにくいのですが、従業員は200人くらいですね。そのうちの25パーセントくらい、実際は50パーセントから75パーセントの人間が自宅から会社のコンピュータを利用できる環境にありますね。セールスとかSEはその場所にいなくったっていいわけですね。製造部門の人はそれでは仕事になりませんけどね。

アセンド社では、定例会議はリモートオフィスからビデオコンファレンスでやるんです。SEはサンフランシスコなんですけど、ロサンゼルス、ダレス、デンバーにいるエンジニアに仕事を依頼したりしています。

日本でもSOHOに関する期待は高まってきています。その理由の1つは、インターネットを使っている多くの人が、インターネットで何ができるかがわかってきたということがあるでしょう。そこで、自宅のコンピュータと会社のコンピュータをつないでしまおうっていうことになってきたんだと思います。日本のこうし

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

た市場の期待をどのように考えていらっしゃいますか？

日本のSOHO市場はまだまだ胎内期ではないでしょうか？　それはちょうどパーソナルコンピュータが登場したころと似ていて、ホスト中心の世界からパソコンをどう使っていくかということを一部のエンジニアたちがやり始めましたが、それと同じような時期に来ていると思います。

ですから、現在は製品を売ることも重要ですが、みんなにSOHOのアイデアを植え付けていく時期ではないかと思っています。きっと日本でも1年から3年の間に、SOHOという考えができるようになるのではないかと思います。日本はネットワークも5年遅れているっていわれていましたけれども、インターネットについても1〜2年遅れているっていう感じですよね。ただ、1〜2年遅れているっていっても、インターネットの気運が高まって、SOHOの気運も高まれば、1〜2年の遅れなんてあっという間に縮まるのではないでしょうか？

これからSOHOに必要な機器っていうのはどんなものがありますか？

当社の「パイプライン50」という製品と比べて「パイプライン25」という製品がなぜいいかというと、アナログポートを2つ付けただけなんだけど、いままでの自宅で働いていたという感覚が、自分のうちに事務所があるっていう感じになってきたんですね。つまり、自宅の電話はパーソナルで、こっちは仕事っていう生活の切り分けができるようになったんです。これは重要なことです。それまでは、会社からすると電話をしたりメールを送ったりするんだけど、自宅でやっている側はちょっとじゃまかななんていう感じがあったのですが、事務所を持っているような精神的な変化が大きく、だんだん仕事に集中できるようになったんですね。アナログ2本というちょっとしたことなんですけど、精神的な分かれ目になるんですね。

「パイプライン」という製品とモデムやTAとの違いは、これらの製品はPCにつないで使うもので「頭脳」がないんですね。でも「パイプライン」はソフトウェアによって、アクセスデバイスとして個別の動きができるんです。ソフトウェアを付け加えれば新しい機能も実現できますし、バージョンアップもできます。ですから必要に応じてソフトウェアをバージョンアップしていきたいと思います。ハードウェアっていうのは、制限がありますけど、ソフトウェアならいくらでも変更できるんですね。これからはどういったものをいまの製品につけ加えていくのかっていうことになるんです。

基本的にこれはデジタルの音声とデータをいっしょにする機械なんです。電話をかけると電子メールとして届くようにすることもできますよね。もちろん、声によってアクションを変えることもできるわけです。

日本ではSOHOは受け入れられそうですか?

東京にはSOHOがもっとあっていいし、東京だからSOHOが活きるんではないかと思います。オフィスの値段も高いですし、交通の問題もそうですよね。きっと伸びうる市場だと思いますよ。

サテライトオフィスがはやったときは、会社は勤務態度についてチェックできないわけですし、みんなで飲みにいけなくなるので、消えていってしまったといわれていますが、テレコミュニティっていうのは、ぜんぜん会社に行かないのではなく、週2日は会社に行ってコミュニケーションをして、週3日は自宅で仕事をするということなんです。ですから、コミュニケーションが不足することはないと思います。全部がなくなってしまうわけではないんですよね。サテライトオフィスは「別のオフィス」という感じもありましたが、SOHOは「同じようなオフィス」ということをいっているんです。ひょっとすると、当社の製品には「飲み屋の機能」も付けないとならないかもしれませんけどね。

日本では、まだ1人1人の机の上にコンピュータがあるわけではないですが、誰かの机の上のマシンを使って電子メールをやりとりできるようにはなってきていますよね。これからは、ますますネットワーク化は進んでいくと思います。

アセンド・コミュニケーションズ社
創立者　ジェイ・ダンカンソン
セールス・マネージャー　ラリー・ジャクソン

http://www.ascend.com

©1994-2007 Impress R&D

パーソナルオフィスを実現している3人に聞いてみました。“私のSOHO体験記”

CASE STUDY 1

SMALL OFFICE HOME OFFICE

グラフィックデザイナー
岡田志乃助さん

そんなに無理はしてません。できるところから1つ1つやっています。

岡田志乃助さんは、広告デザイン、ロゴデザインなどを中心に活躍するグラフィックデザイナー。事務所は「株式会社ページフィールド」という名前だ。最近はインターネットマガジンのアートディレクターで忙しい。仕事で使っているのはもちろんマッキントッシュ。パソコンや通信も大好きという岡田さんは、インターネットマガジン編集部と仕事を始めるにあたって、インターネットの導入を決意したのだ。

雑誌の仕事というのは、どうしても不規則になりがち。ましてや同じ場所にない編集部や時間との戦いの中でうまくコミュニケーションをとりながら仕事すすめていくのには、インターネットはどのように利用しているのだろうか？

ページフィールドさんのシステム構成＝マッキントッシュは11台ある。5人のスタッフに1台ずつある。しかも共通のファイルサーバーとして1台用意してある。

インターネットマガジン編集部との間はISDNのバランスド接続で128Kbpsでファイルの転送が可能。インターネットへはIIJのネットワーク型ダイアルアップIP接続（同期64Kbps）で接続。すべてのマシンからIP接続できるようになっている。

そもそもコンピュータと出会ったきっかけはどんなことですか？

この事務所を始める前に勤務していた会社で、DTPの専用機の広告の仕事をしたときですね。そのときに初めてコンピュータを使ってデザインとかができるということを知ったんです。もともとワープロが好きだったんですね。デザインのラフを作るときに手書きで文字を書かなければならなかったんですが、私はレタリングが下手だったのでワープロを使っていたんです。ちょうどそのころマッキントッシュIIが出てきて、日本でも本格的にDTPが流行ってきたんです。その後はほとんどマッキントッシュを使ったデザインの仕事をしています。

現在こちらの事務所では何人くらいで仕事をされているのですか？

5人です。コアタイムのないフレックスタイム制ですから、みんな好きな時間に来て仕事をしているっていう感じですね。

ここに勤務していない人でも、自宅からコンピュータネットワークを使っていっしょに仕事をしている人もいるのですか？

パソコン通信を使える人を含めても3人くらいですね。インターネットを使える人はまだ1人しかいません。ニフティサーブはもう特別なものではないですね。ほとんど誰でも使えますし。

コンピュータネットワークを仕事で使う前と後で変わったことはありますか？

単純に、いろんなことの効率がよくなるということですね。一方で納期のスケジュールがきつくなるような傾向にありますけど（笑い）。だから自分で自分の首をしめているような感じもしますよ。

ネットワークを使うからっていって、まるで人と会わなくてすむというようにはならな

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

いと思います。もちろん、いままでの作業から考えると半分くらいは会わなくてもよい用件だったような気がします。

そのうち、ネットワークでスタッフを募集して、CU-SeeMeで顔を合わせて頼めればいいようになるといいですけれども。

いまのコンピュータネットワークになにか不満はありますか？

グラフィックデザインの場合は、データが大きいんですね。ちょっと画像データとか使うと何十メガバイトにもなってしまいます。もっと高速な回線がないと、簡単にデータを受け渡たしたりすることは難しいと思います。

この事務所のコンピュータ環境について教えてください。

最近はリモートルーターを導入して、64Kbpsのネットワーク型のダイアルアップIP接続ができるようになりました。それにインターネットマガジンの編集部との間でISDNで128Kbpsで通信できるファイルサーバーを作りました。これは電源をリモートで投入できるようになっていて、事務所に誰もいなくてもファイルのやりとりができるようになっています。できあがったデータを好きなときに持っていけるようになってきましたね。こういうことがそんな特別なものを必要としないでできてしまうっていうのはいいですね。あとは回線が1.5Mbpsくらいになると、いよいよ会社にこなくてよくなるかもしれません。でも、自宅には自分の仕事部屋がありませんし、実は自宅で仕事するのはいやなんですよ。スタッフとのコミュニケーションという意味では全然不安ないけど、プライベートと仕事がごちゃごちゃになりそうです。

今後の課題は何ですか？

これからは、デザインと編集と印刷をどうやってコンピュータネットワークでつなぐかというところのにいちばんの興味があります。作業の流れがせっかくコンピュータ化されても、一部にアナログの要素が入ってくるといきなり効率が落ちるんです。でも、あんまり欲張ってはいないですよ。できるところが徐々にやればいいと思っています。

つぎのステップとしては、サーバーだけはなくて、自分のマックを起動してファイルを取れるようにするっていうことですね。そうなれば、他の場所に行ったときでも、あのファイルが欲しいなんて思っても、自由にファイルが取れて便利だし、なにしろ安心ですよね。

共有するものがあれば、物理的に同じ場所で働く必要はないと思いますか？

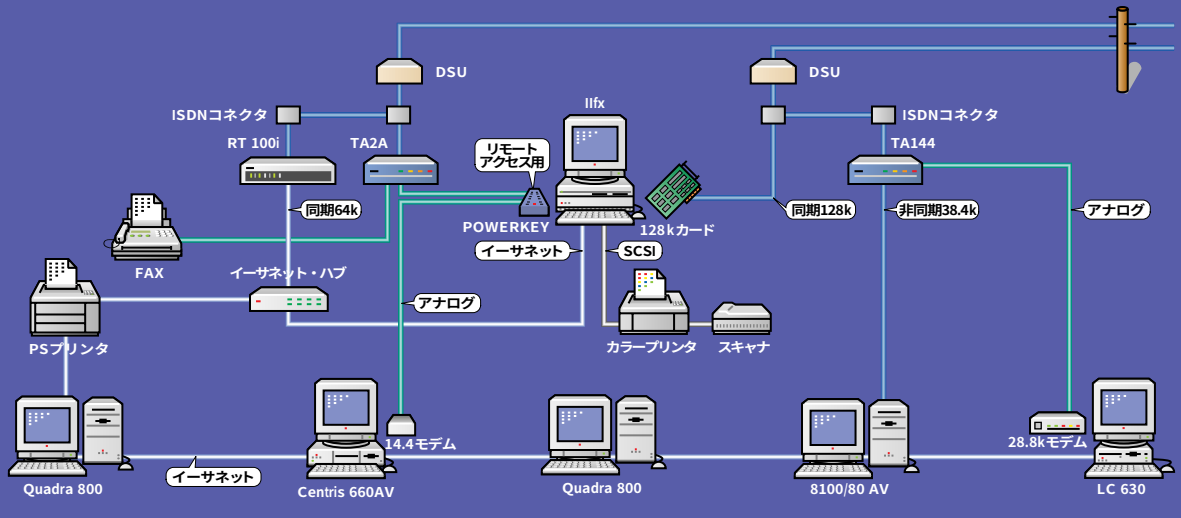
仕事するっていうことは、結局は人と人ですよね。これからはスタッフの管理について考えないとだめかもしれませんね。ネットワークでつながっているからっていっても、個々に任せておいて、個々が走りすぎでもだめなところがありますから。

ここにある機材の選定や設定は自分でやったのですか？

もちろん自分ですべて機材を導入したり、設定したりしてきています。けっこうそれはそれで大変なんですよ。でも、基本はパーソナルコンピュータですからね。ちょっとがんばればなんとかなります。ただマッキントッシュだけでなんとかしたいと思っているところがちょっと難しくしているかもしれません。

こういう小さなオフィスはちょうど孤島みたいなものです。個人が小さな島に行ってしまったら、サバイバルするしかないでしょう？ なんでも自分でやらなければならないんです。その代わり、自分で好きにできるということもありますね。多少の故障なら自分で直せるくらいの知識がないと、SOHOなんてとてもできないです。要するに自分で工夫してできるということがおもしろいわけですよ。

Figure :ページフィールドのシステム構成図



©1994-2007 Impress R&D

パーソナルオフィスを実現している3人に聞いてみました。“私のSOHO体験記”

CASE STUDY 2

SMALL OFFICE HOME OFFICE

雑誌編集者
千葉哲也さん

毎日が日曜日。最初の半年はコレで苦しみました。

千葉哲也さんは、アポロ出版という出版社で「月刊くるま選び」や「月刊マイカー購入ガイド」という雑誌を編集していたプロの編集者。クルマ好きで、会社の規模なんて関係なく、楽しい仕事がしたいという人。出版社を退職し、独立後はDTPをてがげ、そして現在ではWWW上での自動車専門誌「オート・アクセル・トゥデイ」を創刊したのだ。

ユニークなのはWWWサーバーがアメリカにあるということ。日本からはネットワークでメンテナンスする。事務所は自宅のマンションに付属しているロフト。スタッフは日本にあと2人。ほとんどはネットワークでコミュニケーションをしながら仕事が進むという。

まだ、有料サービスではないが、今後は広告収入や読者からの購読料の徴収システムなどを考えている。

千葉哲也さんのシステム構成＝事務所は東京都中野区と富士山のふもと河口湖にある。中野区の事務所には、マッキントッシュのクアドラ8100/80とLC575。インターネットへはリムネットのダイアルアップIP接続（28.8Kbps）だ。

いままではどのようなお仕事をされていたのですか？

編集の仕事って、結局は写植屋さんとの戦いなんですね。写植屋さんが昼間にやった仕事を夜中に校正するんですね。これをなんとか編集主導でできないかとずっと思っていて、DTPを調べたりしていたわけです。その後、「月刊マイカー購入ガイド」という雑誌の編集長をやらせてもらったときに実際にDTPを導入したわけです。

そして一昨年、会社を辞めたわけです。編集の仕事っていうのは、編集部にいなければならないというものでもないですし、ある程度流れがわかれば、人に迷惑をかけないように共同作業ができるのではないかなと思うようになってきたんですね。

こちらは自宅兼事務所なんですね。このWWW雑誌を編集しているスタッフの方は何人くらいいらっしゃるのですか？

日本のスタッフは私を含めて3人です。1人は英語版のための翻訳を担当しています。基本的なコンテンツは私が担当しています。もう1人はビジュアルの制作を担当しています。

それから、サーバーはアメリカにあるのですが、コンピュータのメンテナンスやサポートをしてもらっている人がアメリカにいます。

サーバーはアメリカにあるそうですね。具体的にはアメリカと日本ではどんな流れで仕事をしているんですか？

日本でHTMLを使ってページを作り、それをアメリカのサーバーにファイル転送しているわけです。アメリカのスタッフとの連絡は電子メールですね。日本で夜にメールを出すと、アメリカは朝なので、連絡がとれるわけです。一日に1ステップずつ進むっていう感じですね。

日本のスタッフともほとんど会ったりしませんね。もちろんビデオテープを渡さないとならないとか、写真のポジフィルムを渡さないとならないというようなこと以外は、ほ

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

とんどメールですんでいるといってもいいでしょう。

スタッフと会わなくても支障はないですか？

それほど感じませんね。それに私はたばこが嫌いなのですが、相手はたばこを吸うわけです。同じ部屋にいてたばこを吸われたら私はたまりませんし、相手も気兼ねしてしまいますよね。その人の好きな環境で仕事ができるというのはいいのではないですか？

会社員としての生活から環境が変わって一番大きな変化はなんですか？

誘惑が多いということですね。これには会社を辞めてから半年間は苦しみました。毎日が日曜日ですからね。仕事をしなければしないですみますし。もちろんお金も入ってきませんけどね。朝、テレビをつけたら、そのままお昼になって「笑っていいとも」までいっきにいってしまいますね（笑い）。堕落してしまうんですよ。

それから、部下を4人くらい使って雑誌を作っていたころから考えると、仕事の手離れは悪いですよ。当然ですけど。ここまでやったからあとよろしくねっていうわけにはいかないですね。でもこれは時間の問題でしょうね。もうちょっとやっていくと、いま関わっている人がみんな編集作業の中のどこをやっているのかっていうことがわかってきて、ちょっと急がなくてはならないなとか、これは明日でいいやっていうことがわかるようになると思います。

こうしたことは、顔を合わせないということで起こる問題ですね。

そうですね。いままで同じ編集部でやっていた人でもないですしね。だから、しばらくはひな形が必要ですよね。あとはミーティングも必要ですね。でも業務のミーティングというようりは、擦り合わせのためのミーティングがいるんだと思います。つまり、会えない環境だと、相手に合わせようとする努力をすると思うんですね。アメリカのインターネットの制作をする会社と仕事をしようとしているのですが、向こうはこちらの編集方針に合わせようとしてくれますよ。そうでなければ、私に契約を切られてしまいますし。会えない環境ですから、こちらからは一生懸命に意図を伝えようとするし、向こうもそれを汲み取ろうとするわけですね。30分くらいで会えるような環境にあると、甘えてしまうところはあるでしょうね。

発表してすぐそんな情報が得られるなんて、車が好きな人にはたまらないですね。

それは、インターネットっていう仕組みが速いのであって、私が努力して速くなっているわけではないんです。誰がやっても同じに速くできるんです。だから、速さをあまりメリットとは思ってませんね。ただ、できたものがすぐに読者に渡せるっていうのは大きいです。

ただ、何もやらなければ、何も起こらないんですね。月刊誌なら、1日くらいなにもやらなくったって大丈夫ですけど。現在は1日4ページ〜5ページくらいは作っていますよ。だから月刊で120ページくらい。英語版もありますから、200ページくらいは作っています。

今後はスタッフも増やしていくのですか？

当面、スタッフを増やすことは考えていません。もし、いまのスタッフが独立したいっていいだしたら、個人としてなりたつように、資本を差し向けられるならそうしていきたいですね。

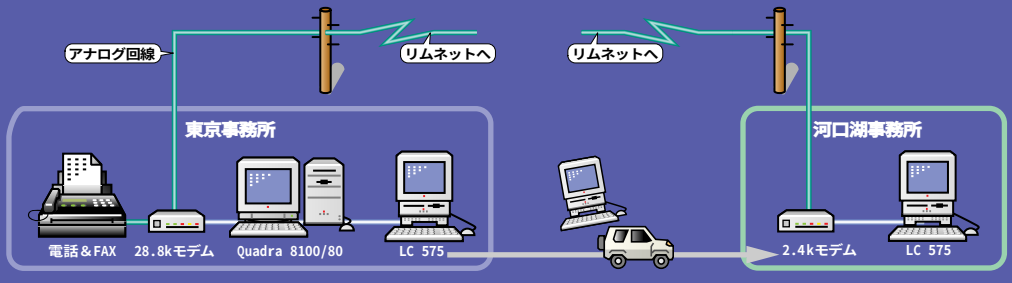
仕事上困ったことはないですか？

仕事をするときに、会社の名前っていうのはけっこう大きな意味がありましたよね。メーカーにいって話をするにしても、前は会社の名前とか雑誌の名前をいえば、業界の人は知っているわけですから、話は早いんです。でもそうでなければ、「インターネット」っていうのがあってね、なんていうところから説明しないと、なかなかわかってもらえない。

大きな会社でも動かしているのは個人ですよね。結局はつきつめていくとパーソナリティなんですね。でもそれだけだと成し遂げられないので、企業があって、資本があるわけですよね。

これからは、起業家精神がこれからは重要視されるようになるでしょうね。

Figure :千葉哲也さんのシステム構成図



©1994-2007 Impress R&D

パーソナルオフィスを実現している3人に聞いてみました。“私のSOHO体験記”

CASE STUDY 3

SMALL OFFICE HOME OFFICE

システムハウス広報
鈴木恭子さん

前よりも自分に対しては厳しくなってきましたよね。

鈴木恭子さんは、北海道のシステムハウスである株式会社ビー・ユー・ジーの広報担当。ご主人は別の会社にお勤めだが、北海道から東京に転勤になり、それを機会に会社から「フレックスプレイス」という制度が適用されたとういわけだ。つまり会社が全面的にバックアップしてくれているという恵まれた環境だ。

東京の聖蹟桜が丘にある自宅のマンションの1室が事務所。4畳半くらいの部屋には会社から支給された机、いす、コンピュータなどが並ぶ。雑誌や資料などもそろっていて、会社の一室という演出はバッチリ。部屋の片隅にはスキーやゴルフバッグが置いてあるところもなかなかいい。

鈴木恭子さんのシステム構成＝パソコンはマッキントッシュのクアドラ900。北海道の本社とはISDNでダイアルアップする。通信機器は自社のリモートルーターである「RouteOne」。もちろん全社的に電子メールでコミュニケーションをとっている。

なんでこのような状況になったのですか？

札幌に本社があるビー・ユー・ジーという会社に入社してちょうど5年目です。今年の3月に主人が東京に転勤になることが決まって、社長に相談したところ、いままでも東京の出版社とかにも出張していましたから、それなら東京でも仕事が続けられそうだということになったわけです。そのときは、てっきり渋谷にあるビー・ユー・ジーの営業所に机をもらえるのかなぁなんて思っていたら、社長に「渋谷の営業所に出社する意味ある？」なんていわれたわけです。確かに情報交換としては行く意味はありますけど、営業所に出社するというのは業務としてはあまり意味がないんですね。そこで自宅で仕事をするということになったのです。

情報が届かなくなるんじゃないかなぁと思ってとても不安でした。ビー・ユー・ジーの場合、プロジェクトのメーリングリストがあって、そこで情報交換をしていますから、情報が届かないということで困ることはそれほどありませんでしたね。

広報という部署では何人くらいの人が働いているんですか？

私を入れて3人ですね。あとはみんな札幌に勤務していています。札幌でないと受けられない取材もありますからね。あとは広告とかパンフレットを作る仕事も札幌でやっています。東京で私がやっているのは、出版社との対応とか、製品の広報関係ですね。これは全部ここでやっています。

連絡方法はやはり電子メールですか？

社内的な連絡は電子メールでほとんどやりますね。最初は孤立しちゃうんじゃないかと思っていたのですが、メールでのやりとりでカバーをするように努力しましたし、ニュアンスの分かりにくいところはこまめに電話をしたりしていました。最初は行き違いもあって、1人で部屋で落ち込んだりしてましたよね。でも電話で話をすれば、たいしたことではなかったりして。

自宅でやっていると仕事とプライベートがごちゃごちゃになりませんか？

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

家にいたら仕事しないんじゃないのってよくいわれますけど、何月何日のプレス発表は全部やってねっていう感じで頼まれますから、そのときまでに準備をしておかないとみっともない結果になりますから、この時期にここまでできていないとだめだぞ、なんて思って、夜中でも仕事をしたりしていますね。

最初はやっぱり強靭な精神力がいるんじゃないかと思っていたんですよね。札幌でもわざわざパワーブックをもって帰って、仕事を全然しないこともありましたし。それはきっと、「家でもできる」っていう程度だからじゃないですか？「家でしかできない」っていうことになれば、プライベートと仕事って切り替えられてしまう。ここしか私が仕事をできる場所はないんだって。

どうしてもやなときは、留守番電話にしてしまいますね。業務終了なんです（笑い）。日曜とか土曜とか、電話が鳴っていても無視してしまうこともありますよ。

仕事がやりにくくなったりしませんか？

前よりも自分に対しては厳しくなってきましたよね。いままでは誰かに甘えてしまうっていうか、「あれお願いしましたよね」なんて人のせいにしたりしてました。最初は以前の感覚でやっていて、いろんなもれが出てきてしまったんですよね。でもよく考えると確認すればいいことですからね。いままでは隣の人もなんとなくこちらを気にしていてくれて、気を利かせていてくれたようなことがまったくなくなるんですね。最初はそれを防ぐためにメールが増えたんです。すごく細かいことも確認しないと心配で。それが負担に思った時期もありましたけど、最近は割り切っていますよ。

いまでは、隣に座っていた人が離れたっていう感じではないですね。逆に展示会の担当が私になったとき、機材の手配はどうするのかとか、デモを作るのは誰かとか、ナレーションはどうするのかとか、以前より緻密に作り込むようになりましたね。

こうした勤務になって、一番変わったことってなんですか？

仕事の面というよりは、プライベートな面でのプラスの部分がありますね。札幌で仕事をしていたときは、自分に余裕がなかったんですね。同じ家の中のことができない状態でもイライラしてしまっていたんですね。仕事から疲れて帰ってきて、家の中がちらかっていたりするとガッカリするんです。それが外に出かけなくてもていいということになると余裕が出てくるんです。

名刺には、自宅の住所が刷ってありますね。

そうです。会社の人にも迷惑かけたくないですから。会社に一度かけて、そこから伝言してもらってでは、お互い負担が大きいですからね。会社にいる男性の中には「自分の奥さんが自宅で仕事していたらいやだ」なんていう人もいたんですよ。確かに、電話はかかってくるわ、荷物は届くわ、人は来るわ、ではね。

仕事の効率はどうですか？

すごく効率はよくなっていますね。会社では集中してやりたいときに、内線電話はかかってきますし、人に話かけられたりすると、あっという間に20分や30分すぎますよね。何となく席にいる＝仕事をしている気になる、ということがなくなって、仕事に対して「漫然と」とか「何となく」ということがなくなったように思います。電話もすべて自分のところにかかってくるものだけですから、余計なストレスが少なくなったようです。

パソコンの設置は自分でやったんですか？

ここにきてからは、電話をかけながら「え？これをどうするの？」なんてやりとりしながら設定したんです。でも、誰も出張してもらわなくてもなんとかなりましたね。

このモニターってすごく重いんですよ。腕にあざを作ったりしてテーブルに上げたんです。ケーブルがなかったりとか・・・。

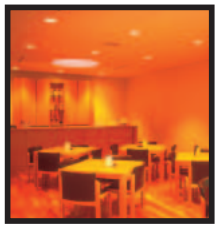
この部屋にあるものはどこまでが会社で用意してもらったものなんですか？

机と椅子と、パソコン、回線、ほとんど全部ですね。マンションを決めるときに、ISDNを引きますっていうのは大家さんにいってありますけど、専用線はだめかもしれませんね。社長はつぎは専用線だなんていってますけど（笑い）。

Figure :鈴木恭子さんのシステム構成図

©1994-2007 Impress R&D

BUG SAPPORO JAPAN



SOHOを自ら導入し、

推進している一歩進んだ経営者に聞く

「3つのフレックス」は電子的なインフラの上に成り立っています

株式会社ビー・ユー・ジー
取締役社長　服部裕之さん

■株式会社ビー・ユー・ジーのプロフィール

設立は1980年。本社は北海道札幌。当時、北海道大学の学生だった服部社長らで北海道のシステムハウスを作ろうということで設立したパソコンベンチャー企業。その後、マッキントッシュ関連のソフトウェア、ハードウェアを中心に開発して急成長した。現在は北海の札幌のテクノパーク内にすばらしい自社ビルを持つ。資本金1億6500万円、1994年度売り上げ29億5000万円の中堅企業。ユニークな組織づくりと仕事のやり方は有名。

ビー・ユー・ジーさんでは「3つのフレックス」というのがあるそうですね。

「フレックスタイム」、「フレックスプレイス」、「フレックスホリデー」というのがそれですね。「SOHO」といえばフレックスプレイス、つまり好きな場所で仕事ができるということですね。そもそも会社を札幌に作ったのは、生まれ育った札幌で仕事をして生活したいのに、適した場所がないということだったんです。ですから、いっしょに仕事をしてくれるみんなもいろんな事情があって、住みたい場所とかが変わってくると思いますので、受け入れられる柔軟性があってもいいのではないかと思っているんです。

誰でもOKなんですか？

うちの会社の場合、他人に迷惑をかけなければいいんですよね。新入社員の場合は先輩が面倒をみなければなりませんから「ちゃんと会社に出てきなさい」っていうことになります。あと受付の人が自宅で仕事したいっていったって、それは無理ですからね。そういう意味ではその仕事に関係する人同士で話し合いがつけばいいことになっています。

通常の会社ですと、従業員とかプロジェクトの管理という問題がありますが、そのあたりはどのようにカバーされているのですか？

問題がまったくないというのはウソですが、損得の問題ですね。管理することで楽なこともあるでしょうけど、従業員がストレスを感じることもありますから、トータルでは管理なんてしないほうがいいのではないかという考えもあるわけです。うちの場合は管理しないんですね。ある程度みんなモラルも高いですし、自主管理をしてもらうというわけです。他人に迷惑をかけない範囲での自由ということです。従業員としては、自己管理能力が期待されているんです。ただ、これは自分にとって辛いという人もいますね。管理されないことの大変さもあるわけで、それだったら管理してほしいなんていう人ですね。とくにうちの会社の場合、放っておかれるという感じがあるようですね。

現在「フレックスプレイス」を選択されているのは何人ですか？

従業員は105人のうち、十名前後ですね。広報の鈴木のケースはけっこうまれですね。多くの場合、週のうち何日かは会社に来るっていうパターンです。札幌と東京でこれだけ距離が離れていても、それほどいままでと変わりませんね。本社にいたときもめ

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

ったに顔を合わせませんでしたから（笑い）。基本的にはメールで情報をやりとりしていますし、電話で話すこともできますからね。当社のフレックスの制度はすべて電子的なインフラの上に成り立っていますから、それがなければみんなとっても大変ですよね。

「フレックスプレイス」で不都合などは発生していませんか？

いままでだと、広報の人間が札幌から東京にわざわざ行かなければならなかったのに、いまでは東京にいますから、細かく対応できるんですね。むしろプラスに作用していると思います。もちろん、札幌でやっていた仕事、たとえば開発に近い仕事とかは東京に転勤する場合に切り離しました。それをそのままやっていたらすごく大変だったでしょう。特にマイナスの話題はいまのところないですね。そして、これからは出産の問題とかがたくさんでてくると思います。実家とか自宅で働きたいという人が増えるでしょうね。

ある程度、設備に投資しても、その人の資質とか、それまでに会社で蓄積した知識などを活かしてもらえるなら、決して高くないですよね。それよりも東京に出張したりすればお金もかかるわけですから。

「フレックスプレイス」を成功させるポイントはなんですか？

まず、経営者にやる気がないとだめですね。始める前はいろんなことが起きそうで不安ですよね。そういう不安な要素もやる気があれば解決つきますよね。そうでなければ、どうしようもなくてやめてしまうでしょう。ちょっと試そうと思うくらいじゃだめですね。

ビー・ユー・ジーでうまくいっているとすると、それは私がやりたいからですね。できれば私は会社なんかに行きたくないし、平日でも休みたいし。自分がそうしたいっていうことはみんなもそうしたいわけだし、それならがんばろうって思うわけです。本気でないなら、やめたほうがいいですよね。覚悟がいりますよ。

私は先月1か月間の休みをとったんです。これは今度作った長期休暇の制度なんですが、これも私が休みたかったから作ったんですね。普通、社長が1か月休むと大変なことになるんですけど、私が休まないとみんなも休めないんですよ。遠慮もあるでしょうし。

私の場合、さすがに会社との関係を一切断ち切って休むというわけにはいかないのですが、メールを読める環境を作っておけば、戻ってきても半日くらいで復帰できるんですね。つまり必要な情報はメールで届いていたっていうことを夏休みに勉強したんです。いつもどおり会社に行くときと、アメリカで遊んでいるときと、些末なことを除けばほとんど同じだったんですね。ぜんぜん困りませんでした。

もちろん、トラブルもあって、メールでやりとりしたこともありましたけど、戻ってきたときに空白がなければ、会社のみんなにとっては、私が会社にいようといまいと関係なかったんですね。社長がいないから仕事が滞ったってことはないですね。

そのように考えていくと、会社という「器」に集まることの意味というのはどうなるのでしょう？

従来の「会社に勤める」という言葉の意味は、「物理的に同じ場所に集う」という意味が強いですね。社内でサテライトオフィスの議論をしたときに、本社に出社できないことの辛さっていうのがあったんです。サテライトオフィスに通勤させられる悲哀みたいなのがあるわけです。本社じゃないと「飛ばされた」というような心理的なものですね。これは物理的な会社の持っている帰属感だったと思うんですね。これからのバーチャルな形での組織への帰属感は何かっていうと、自分がその会社に帰属していることによって、自分が社会に対して果たしている役割が明らかになっているかどうかっていうことだと思います。自分がビー・ユー・ジーに勤めている結果として、社会にこんなに貢献しているんだっていうことを感じられればビー・ユー・ジーの社員だって自信を持っていえるようになりますよね。そうでないと、「私はライターをやっています」とか「広報をやっています」とかいうことが自分のプロフェッショナリティになって、会社に帰属することにはならなくなると思います。つまり、自分のプロフェッショナリティをある時間提供して給料をもらっているっていう図式ですね。でも会社としては帰属意識を持ってもらった方がいいと思うので、いろんな意味で社会的な存在意義をきちんと持っていないと辛くなると思います。こうしたことを経営者が提示できないと、物理的な帰属がはずれていく中で会社の存在は難しくなると思いますね。

©1994-2007 Impress R&D

SOHO用ハードウェアガイド

特別な機材はもういらない。手に届くものだけでここまでできる！

HARDWARE SELECTION

SOHOを実現するのに、ハードウェアはいったいどのくらいのものが必要になるのだろう。実は特別の機材は必要ないのだ。ここではSOHOするための基本モデルと代表的な機材について簡単に紹介することにしよう。

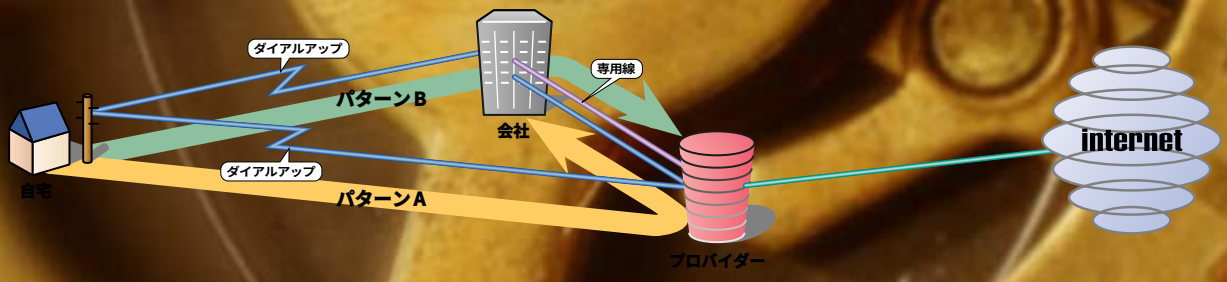
■プロバイダー経由にするか？ 会社にダイレクトに接続するか？

会社のコンピュータ環境を自宅から使ったり、電子メールでのやりとりを考える場合、接続する方法としては、大きく分けて2つある。つまりインターネットサービスプロバイダー経由でやる場合と、会社がアクセスのためのノードを用意し、そこにダイレクトにつなぐ場合だ。

前者の場合は、会社のネットワークがファイアーウォールで守られていたりすると外部からの接続ができない可能性もある。

後者の場合、会社がインターネットに専用線でつながっている場合、自宅からもインターネットへメールが出せるように構築できる。つまり社内にあるコンピュータの出店がたまたま自宅に来たという感じになるのだ。

プロバイダー接続と会社に直接接続した場合



コスト的な問題や社内リソースの有効活用を考えると、SOHOのためにはプロバイダー経由よりも会社へダイレクトにつなぐほうが望ましいのかもしれない。

ここでは会社内にアクセスを受け入れるノードを設置するためのハードウェアについて紹介することにしよう。

ユーザー側の設備については、インターネットマガジン9月号のISDNに関する特集などを参考にしていただきたい。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

▶アナログモデム接続◀

もっとも簡単なのがアナログモデムを使ってアクセス用のノードを作ること。つまりサーバーとなるパソコンにモデムを複数つけておいて自宅からダイアルアップするというパターンだ。ユーザー側もモデム以外の特別な機材は必要ない。

1-4

● 1ポートから最大４ポートまでのノードを作る

PC/AT互換機はシリアル通信用のCOMポートを標準で4ポートサポートしている。ハードウェアとしての実装は通常1～2ポートだが、増設することで4ポートまで利用可能となる。そこで、2ポート程度のシリアルポートを持った入出力カードの増設を行い、ウィンドウズNTサーバーでCOM1からCOM4までをRASでサービスする。

■拡張マルチI/Oカード

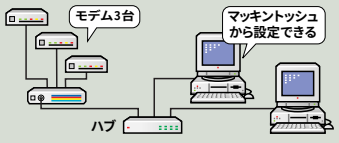
Justy JIF-03（ISAバス版）
株式会社トライコーポレーション
価格 9,800円

16550互換シリアル2ポート、ECP/EPP対応パラレルポート1つ、ゲームポート1つ、IDEコントローラ、2.88MB対応FDDコントローラ。すべての機能をそれぞれON/OFFすることが可能。通信速度115.2Kbps/ポート。実質価格で6,000円から7,000円ぐらい。他にPCIバス版もある。

■拡張マルチI/Oカード

QuickStream/3
スワイヤトランステック株式会社
価格：148,000円

リモートアクセス用アクセスサーバー。アップルトークとTCP/IPに対応し、最大115.2Kbpsをサポートするモデムポートを3つ内蔵。イーサネットインターフェイスは10Base-Tと10Base-2。



8-10

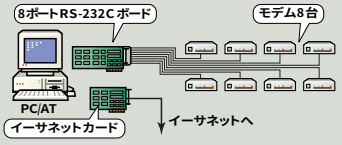
● ８ポートから１０ポート程度のノードを作る

PC/AT互換機標準のCOMポートで足りなくなると、より本格的な対応が必要となる。比較的安価な方法として、PC/AT互換機用のシリアルポートの拡張カードの導入である。ウィンドウズNTでRASが利用できる8ポート程度のシリアル拡張カードを導入し、COMポートと合わせて全部で10～12ポート程度をRASでサービスする。ただしボードによっては接続するモデムの数によって使用可能な通信速度が変わることもある。

■インテリジェントマルチシリアルカード

DigiBoard PC/8e
住商データコム株式会社
価格 142,000円

シリアルポートを8ポート増設するISAカード。最大38.4Kbps/ポートの速度が得られる。ウィンドウズNTでは割り込み（IRQ）を必要としない。RISCプロセッサを利用したPC/8emという製品では、最大115.2Kbps/ポートとなる。また、PC/8emの他にPC/16em、PC/32emや、EISA版のEISA/8em等、豊富な種類がある。



20-30

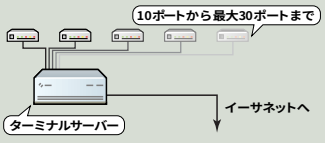
● ２０ポートから３０ポート程度のノードを作る

ポート数がある程度増えると、PC/AT互換機での対応は将来性を加味すると現実的ではなくなってくる。ここで登場するのがコミュニケーションサーバーと呼ばれるものである。通常、LANに接続するEthernetのポート1つと、外部との通信に使う複数のシリアルポートという構成となる。

■ターミナルサーバー

Livingston PortMaster PM2E
株式会社ヒューコム
価格 610,000円

シリアルを10ポート持つPM2E-10、20ポート持つPM2E-20、30ポート持つPM2E-30があり、最初の2つは30ポートまで拡張できる。また、10ポートのみで拡張できないが、小型で経済的なPM2という機種もある。最大115.2Kbps/ポートの速度が得られる。プロトコルとしては、TCP/IP/UDP、IPX、SLIP、CSLIP、PPP、Telnet、Rlogin、PPP等。RIPによるルーティング、Proxy ARP、オンデマンドダイヤル、コールバックや、PAP、CHAP等の機能がある。



©1994-2007 Impress R&D

▶ISDN接続◀

快適なネットワーク環境を作るなら、多少コストもかかるがISDNに圧倒的に分がある。最低で64Kbps、最大で128Kbpsの通信速度を得ることができる。安定性を考えても圧倒的にお勧めの環境だといえるだろう。

1B-2B

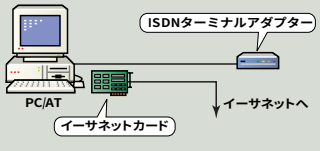
● 1～2チャンネル（1B～2B）

ISDNのINS64を1回線用意し、外付けのTAが1台、あるいは内蔵型のカード1枚を用いて接続する。外付けの場合、PC機との間のやり取りは非同期通信が基本となり、INS64での通信もV.110で非同期38.4Kbpsとなるのが平均の仕様である。PC側に同期64KbpsのI/Fを用意できて、TAでも同期64Kbpsがサポートされていれば、64Kbpsでの通信が可能。外付けの場合、基本的にウィンドウズNTのRASを用いて受けることになる。内蔵型カードの場合、通常同期64Kbpsでの通信が可能。

■高速非同期通信ターミナルアダプタ

AtermIT35
日本電気株式会社
価格84,800円

57.6Kbpsでの非同期通信が可能。AtermIT35には非同期/同期PPP変換機能が搭載されているので、INS64を同期64Kbpsで利用できる。アナログポートを1ポート持っている。64Kbpsのディジタル専用線にも対応。



2B

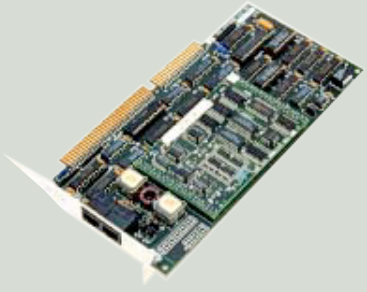
● 2チャンネル（2B）

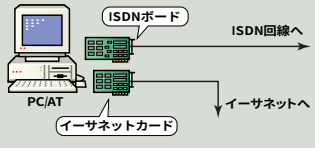
ISDN INS64では、2本のBチャンネルをフルに利用して2か所と同時に接続をしたり、2本をまとめて128Kbpsとしての接続が可能である。

■ISDNボード

DigiBoard PC-IMAC
住友データコム株式会社
価格148,000円

1Bでの同期64Kbps通信。あるいは2Bを使っての同期128Kbps通信が可能。ウィンドウズNTでの正式サポート品なので、RASサービスを利用できる。





8B

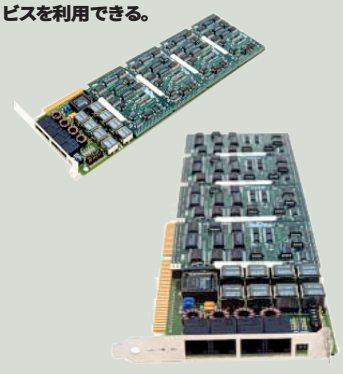
● 8チャンネル（8B）

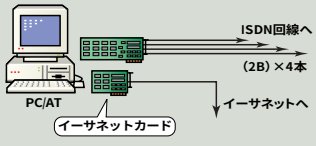
8チャンネルをサポートするには、ISDN INS64を4回線用意する必要がある。上記2チャンネル用のものを4つ導入することも考えられるが、価格、PC機内のスロット数などを考慮すると、8チャンネル用のボードが考慮範囲となる。

■ISDNボード

DigiBoard PC-IMAC/4
住商データコム株式会社
価格 580,000円

1枚のボードでISDN INS64を4回線、すなわちBチャンネルを8本接続することができる。ウィンドウズNTの正式サポート品なので、RASサービスを利用できる。





ここで紹介するのは、アクセスサーバーを作る場合の機材だ。価格的にみると高価なものもあるが、ノード1つ分として計算すると、それなりに納得できるものではある。クライアント側の機器に関しては、本誌9月号でISDN特集をやっているので、そちらを参照して欲しい。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

HARDWARE SELECTION

▶リモートルーター◀

ネットワーク同士を接続するルーターの機能をもったISDNアダプター。中にはターミナルアダプター（アナログポート）がついているものもあり、これ1台でコンピュータと電話などのアナログ機器も収容できる便利なものだ。

2B

●2チャンネル（2B）

定価で20万円を切る価格帯にISDN INS64のリモートルーターが出てきた。リモートルーター同士をPPPで接続することで、LAN間接続が容易に実現できる。ルーター上の機能も豊富で、オンデマンド接続、コールバック等の機能が備わっている。

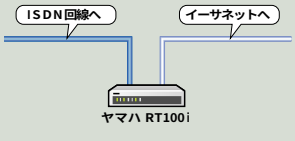
定価で20万円を切る価格帯にISDN INS64のリモートルーターが出てきた。リモートルーター同士をPPPで接続することで、LAN間接続が容易に実現できる。ルーター上の機能も豊富で、オンデマンド接続、コールバック等の機能が備わっている。

■リモートルーター

YAMAHA RT100i

住商マシネックス中部株式会社
価格 260,000円（キャンペーン価格198,000円）

1Bでの同期64Kbps、2Bでの同期128Kbps通信が可能。また、デジタル専用線の64Kbpsと128Kbpsにも対応。プロトコルはIPとIPXをサポート。ルーティングプロトコルはRIP、またSNMPプロトコルにも対応。ルーター間はPPPで、接続は自動/手動とも可能。データ圧縮はPredictor1とVJC。

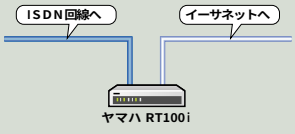


■リモートルーター

Ascend Pipeline 25

ネクストコム株式会社
価格 148,000円（予価）

1Bでの同期64Kbps、2Bでの同期128Kbps通信が可能。オンデマンドで1Bと2Bとの間を自動切り替え。プロトコルはIPかIPXを選択。アナログポートが2ポートあるので、通常の電話機、ファクシミリ、モデム等の接続が可能。データ圧縮機能は別売。

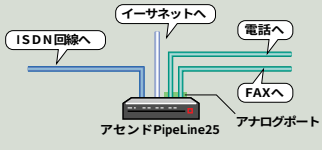


■リモートルーター

CISCO 1003

日本シスコシステムズ株式会社
価格 197,000円

1Bでの同期64Kbps、2Bでの同期128Kbps通信が可能。プロトコルは基本的にIPをサポートし、ブリッジ機能も搭載。ソフトウェアとしてIP/IPX/ATセットを選ぶと、IPXとAppleTalkも可能。ルーティングプロトコルはRIP、またSNMPプロトコルにも対応。PCMCIAスロットを持ち、FlashROMカードでもソフトウェアが導入可能。



▶モデム／ISDN混合◀

アナログのモデムとISDNを適宜組み合わせてサーバーを作りたい人向け。自分でボードを入れて組み立てる楽しさもある。

Free

●組み合わせ自在のアクセスサーバー

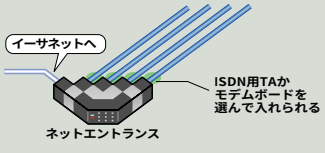
SOHOのケーススタディでも紹介した札幌のビー・ユー・ジーが開発したユニークな商品。スロットが5つついており、ここにISDNのTAやファックスモデムを好きな組み合わせで挿入できる。そしてこの機器をイーサネットに直結すれば、アクセスサーバーにもなるし、モデムプールとしても使うことができるというもの。まさにユニークな発想で作られた逸品。

■リモートルーター

ネットエントランス

株式会社ビー・ユー・ジー
価格 197,000円

アップルリモートアクセス（ARA）のサーバーとして動く。アップルトーク／IPゲートウェイ機能も持ち、TCP/IPアプリケーションをARA経由で利用できる。最大5台までのモデムやISDNのターミナルアダプタをセットでき、ダイアルアップだけではなく、モデムをシェアすることもできる。イーサネット（10Base-5と10Base-T）インターフェイスを装備。



©1994-2007 Impress R&D

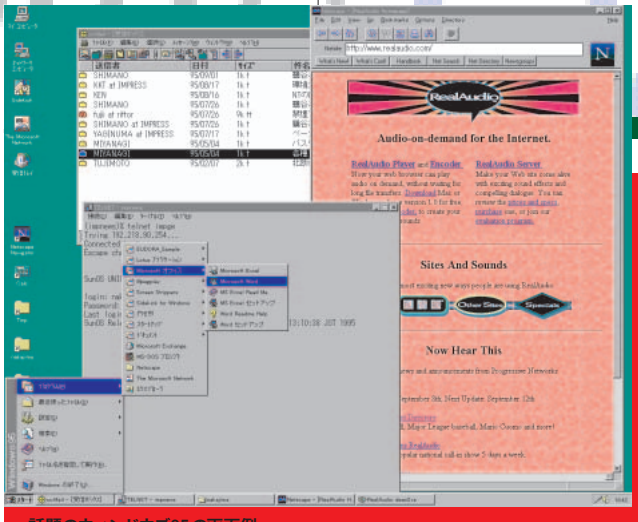
SOHO用ソフトウェアガイド

いま話題のOSはSOHOのためにある?!

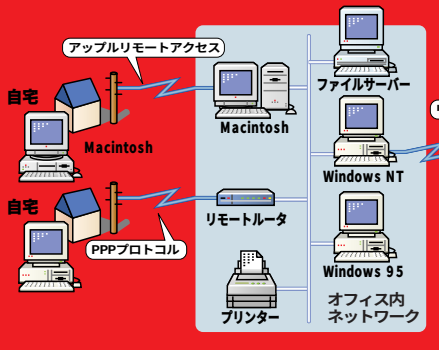
【最新オペレーティングシステム事情】

従来のオペレーティングシステムでは、SOHOどころかネットワーク機能は乏しく、他のソフトウェアを導入しなければなかった。しかし、最近話題の新しいオペレーティングシステムは、なんとSOHO機能を包含し始めたのだ。
LANの普及が遅れていると言われている日本だが、これを機会に一気にネットワーク化が進む可能性もある。すでにコンピュータは1台ではなくネットワークで使うのがあたりまえなのだ。

SOFTWARE SELECTION



話題のウィンドウズ95の画面例



自宅にいながらオフィスのネットワークにつながったように見える。

いろいろなOSのマシンが1つのネットワークにつながり共存できるようになってきた。

■SOHO用システムの条件

ネットワークを敷く場合、考慮しなければならない点がいくつかある。

まず、専任のアドミニストレーターなどを置ける余裕があるはずもないので、構築や運営に際してさほど複雑な知識を求められないことが重要だ。線をつないでみたらつながったというくらいにあっけないのがちょうどいい。それでもトラブルが発生するときには発生し、長い時間をとられてしまうものだ。

つぎに、コストの点も重要だ。できるだけ、安上がりにネットワークを構築できたほうがいいに決まっている。ちなみに、ピア・ツー・ピアのネットワークで、サーバーに占有されるパソコンをなくし、すべてのマシンを通常の業務に使えるようにした方がコストの負担は少ないが、ペンティアムマシンが20万円を切る価格で流通している現状を考えると、必ずしもこの条件はあてはまらなくなってきている。上位機を購入したときに、多少古さを感じてきている486/33程度のマシンをサーバーに回すといった使い方でも十分に実用になるだろう。何百台もの端末がぶらさがる大企業ならともかく、SOHOにおいて、最上位機をサーバーにまわすことのメリットはそれほど大きくない。逆に、10万円以下で廉価なマシンを入手し、それをサーバーに仕立て上げるという手もある。

さらに、電話回線やISDNを経由したリモートアクセスの機能が欲しい。28.8Kbpsのモデムがポピュラーになってきているいま、出張先や自宅から事務所のサーバーにアクセスしたり、逆に、仕事場から自宅のパソコンにアクセスできるのは、想像以上の安心感と便利さを生む。機動性の高いノートパソコンとの併用は特に便利だ。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

SOFTWARE SELECTION

▶オペレーティングシステム◀

ネットワークが難しいと言われていたのは昔の話。これからのオペレーティングシステムにはネットワーク機能はあたりまえなのだ。ウィンドウズ95、ウィンドウズNT、マッキントッシュという3つのメジャーなオペレーティングシステムについて探ってみた。

■ウィンドウズ95はSOHO用のオペレーティングシステム？！

こうした条件を満たす最良の選択は、もうすぐ日本語版がお目見えすることになっているウィンドウズ95ではないだろうか。価格的には米国版が90ドル前後でショップに並んでいるところを見ると、日本語版もそれに近いものになるだろう。また、新しくパソコンを導入すれば、ほぼ例外なく基本ソフトとしてプレインストールされてくるのだから、余分な出費がネットワークカードなどだけですむ点も大きなメリットだ。

ウィンドウズ95にビルトインされたネットワーク機能は、ワークグループ単位でのファイル共有とプリンタ共有を実現する。ネットワークに接続された個々のパソコンが持つディスク資源やプリンタ資源を、どのパソコンからでも利用できるというものだ。ネットワークをセットアップしたウィンドウズ95のデスクトップには、「ネットワークコンピュータ」というアイコンが表示され、それを新しいシェルであるエクスプローラでブラウジングしていくと、それぞれのパソコンが公開しているリソースに容易にアクセスすることができる。

ウィンドウズ95ではプロトコルとして、NetBEUI、TCP/IP、IPX/SPX互換などが使える。ウィンドウズ95だけで閉じたネットワークであれば、設定などが容易なNetBEUIを使うといいだろう。

■中核にはウィンドウズNT

一方、ウィンドウズNTは、マイクロソフトの次世代OSで、ウィンドウズ95よりも、潤沢なメモリやハードディスク資源を必要とするが、その堅牢性や信頼性では、互換性を保つために、様々な妥協を強いられているウィンドウズ95よりも数段上をいっている。現行の日本語版の最新バージョンは3.5となっている。

NTには「サーバー」と「ワークステーション」の2種類があり、価格的にも大きく違う。機能面での決定的な違いは、NTサーバーがドメインコントローラーとして機能できるのに対して、NTワークステーションではその機能が省略されている点だ。つまり、NTワークステーションのネットワーク機能は、極端にいえば、ウィンドウズ95のそれとさほど違いがない、ワークグループ単位のものとなっている。ただし、NTでは、NTFSという専用のファイルシステムを使うことができ、それでフォーマットされたディスク上のリソースに対しては、ファイル単位にもアクセス権の設定が可能だ。

NTサーバーが持つドメインコントローラー機能は、ネットワーク全体をひとつのドメインとして定義するもので、ログオンという手続きを、個々のパソコンではなくネットワークに対して行うことができるようになる。つまり、オフィスがあって、そこにネットワーク接続された複数台のパソコンがあった場合、それぞれのパソコンは、ドメインにログオンすることになり、相互に情報を共有することができる。

もし、予算に余裕があるのなら、パソコン1台をNTサーバー専用にし、その他のパソコンはウィンドウズ95を使うというのが理想的だ。特に、ノートパソコンとウィンドウズ95のネットワーク機能はPnP（プラグアンドプレイ）のサポートにより、PCカードネットワークインターフェイスの抜き差しのみで、ドメインへのログオン、ログアウトが完了する。もちろんホットスワップで、リブートの必要はない。その便利さは筆舌に尽くしがたい。

ちなみに、ウィンドウズ95、ウィンドウズNTともに、ダイアルアップPPPをサポートし、インターネットへの接続も容易だ。

■マッキントッシュもSOHOへの道を歩む

パソコン業界の盛り上がりは、ウィンドウズ95一色といった感じだが、マッキントッシュの方がどうなっているのだろう。

マッキントッシュは古くからアップルトークというネットワーク機能を持っていた。知らず知らずのうちにマッキントッシュを使っているユーザーの人はネットワークの御利益にあずかっているのではないだろうか？

最近の話題としては、マッキントッシュにもインターネットへのアクセス機能が付加されたことだろう。「MacTCP」といわれるこのモジュールは、既存のマッキントッシュのネットワークとTCP/IPやPPPなどのインターネットプロトコルを切り替える一種の「スイッチャー」だ。

また、「アップルリモートアクセス」という別売りのモジュールも用意されており、これを使えばモデムなどを介して、離れたところにあるマッキントッシュのネットワークの一部になることができる。

いずれにしても、マッキントッシュの設計思想どおりに、非常に簡単にネットワークを構築することができるわけだ。

©1994-2007 Impress R&D

SOHO用ソフトウェアガイド

SOHOを活かすのはアプリケーション、そしてあなたの運用【アプリケーションのいろいろ】

ネットワークOSが安定して動き出したら、今度は、そこで運用するネットワーク特有のアプリケーションについて考えていこう。
ネットワークOSが安定して動き出したら、今度は、そこで運用するネットワーク特有のアプリケーションについて考えていこう。ネットワークOSが安定して動き出したら、今度は、そこで運用するネットワーク特有のアプリケーションについて考えていこう。

●リソースの共有

これは、どんなネットワークOSでも備えている最も基本的な機能で、アプリケーションレベルでとやかくいう問題ではない。ここでふれておきたいのは、アプリケーションそのもののシェアリングだ。

たとえば、「マイクロソフト・オフィス」や「ロータス・スーパーオフィス」など、最新のアプリケーションは、サーバーへのセットアップという機能を持っている。このセットアップを選択することで、いったん、すべてのファイルがファイルサーバー上に展開される。個々のパソコンは、公開されたそのディレクトリにアクセスし、そこからセットアッププログラムを起動することで、CD-ROMやフロッピーディスクなどをいっさい使わずに、セットアップができる。また、ワークステーションセットアップを選択すれば、ローカルのハードディスクにアプリケーションをコピーするのではなく、サーバーにプログラムを置いたままの状態で、そこからロードすることができる。

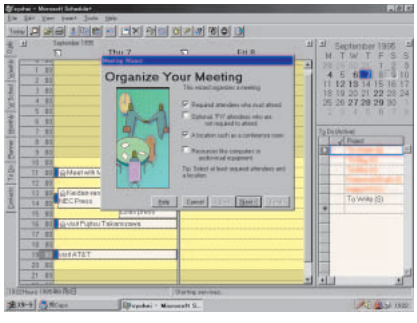
肥大化したオフィスアプリケーションは、ディスクの容量を占有しがちだが、こうした方法を使うことで、ローカルのディスクを節約することができるわけだ。もちろん使用許諾に見合ったライセンスが必要だ。

また、テンプレート類など、それぞれのユーザーが共通して使うファイルもサーバー上に置いておけばいい。これは、ディスクスペースの節約というよりも、アップデートしたときに、再配布しなくてもすむというメリットの方が大きいだろう。

マイクロソフトは、すでに、米国でウィンドウズ95と同時に、「オフィス95」を出荷しているが、それらを見ると、ネットワークを強力にサポートし、ワークグループコンピューティングを効率的なものにするためのシカケが満載されていることがわかる。

たとえばデータベースソフトの多くは、従来からマルチユーザーによる同一ファイルのオープンが可能で、同時に複数のユーザーが同じファイルを編集することができたが、新しい「エクセル」は同等のことができるようになった。大量のデータを手分けして入力しなければならないケースは少なくないが、そんな場合に重宝するはずだ。もちろん、全員が共有するべきデータベースは、サーバーに置いておき、誰もがアップデートできるようにしておくべきだろう。こうした情報の共有による便利さは、ネットワークを導入したことで、最も最初に実感できるメリットだ。

こうしたファイル共有の醍醐味はウィンドウズ95の「ブリーフケース」というアプリケーションに表れている。「ブリーフケース」と名づけられた一種のフォルダーにファイルサーバーにあるファイルをコピーして入れておくと、必要に応じてお互いが更新されているかどうかをチェックして、実体とコピーの内容を一致させることができる。ファイル共有をより一歩すすめたこの概念は特に紹介しておく価値のあるものだ。



「スケジュール＋」の画面例

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

▶アプリケーションソフトウェア◀

ケーススタディでも多くの人が証言しているように、離れたオフィスの人とのコミュニケーションには電子メールが不可欠。まさにSOHOの血液と言ってよいだろう。

●共有できるPIM

また、マイクロソフトなら「スケジュール＋」、ロータスなら「オーガナイザー」というPIMがそれぞれのオフィス製品に入っている。マイクロソフトは「オフィス95」の日本語版をウィンドウズ95日本語版とそれほどラグをおかずに出荷するだろうし、ロータスは、「オーガナイザー」の機能をさらに強化したR2.1Jをリリースしたばかりだ。

これらに共通する強化ポイントとして、グループスケジューリング機能があげられる。これまでは、個人のスケジュール情報や、住所録などの情報を効率的に処理するためのものとして位置づけられてきたPIMソフトだが、その使い勝手のよさは、そのままに性格を大きく変えようとしているわけだ。

たとえば、会議の日時を設定するにあたって、会議室の空き状況、そして、参加メンバーのスケジュールの空き具合などを確認し、全員が空いている日時にスケジュールを仮設定すると、個々のメンバーに電子メールが発信され、それぞれが承諾すると、スケジュールが正式決定するといった機能が搭載されるようになってきているわけだ。

●電子メール

こうしたアプリケーションからも利用されるように、ネットワークにおけるユーザー間のコミュニケーションを担う電子メールの存在は、きわめて重要だ。

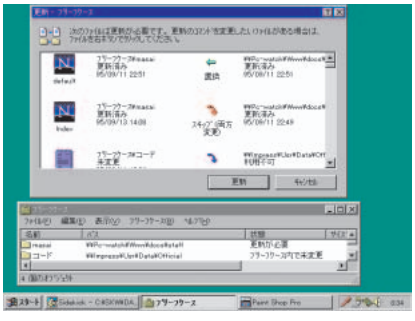
SOHOをうまく運用している事例を見ると電子メールや電子メールを使ったメーリングリストなどの管理によって顔の見えないスタッフ間の意志疎通を図っている。そういった意味でSOHOという体内をめぐる「血液」のような役割をする重要なものとなるだろう。

現在、パソコンLANの環境でポピュラーに使われている電子メールソフトには、ロータスの「cc:Mail」とマイクロソフトの「マイクロソフト・メール」がある。エンタープライズユースでは、事業所ごとに電子メールを交換したり、インターネットメールなどとの統合のことを最初から考えなければならないが、小規模なオフィスならば、ウィンドウズ95やウィンドウズNTにオマケでついてくるもので始めてみてもいいだろう。ただし、これらの電子メールソフトではインターネットとのメールのやりとりはできない。そこで、メールサーバーとなるマシンにSMTPゲートウェイと呼ばれるメール交換用のソフトウェアを導入しなければならない。「cc:Mail」、「マイクロソフトメール」のいずれもこうしたインターネットとのメール交換をするためのモジュールが用意されている。

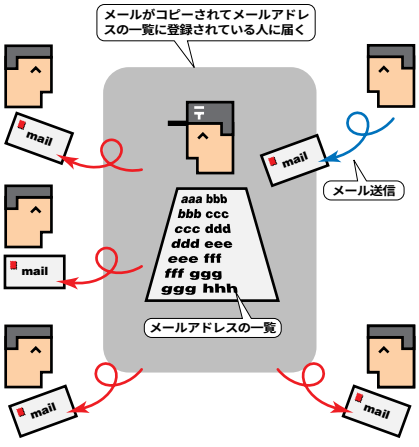
●SOHOを成功させるにはアイデアが重要！

さらには、ネットワークゲームや、キーボードによる筆談を可能にするチャットなど、ネットワークを張ることによって利用できるアプリケーションソフトの種類は多岐にわたる。

企業ユースでは、ロータスの「ノーツ」のようなグループウェアに注目が集まっている。マイクロソフトもそれに対抗する形で、「エクスチェンジ」サーバーと呼ばれる次世代のメッセージングシステムの開発を急いでいる。これらを利用すれば、電子会議システムのようなアプリケーションもすぐに実現できるし、日定型の共有文書データベースなどの構築もたやすい。が、SOHOという環境を考えた場合、大きな出費をできるだけ避けながら、最大限の効果をあげたいという欲求がある。この不況の中、エンタープライズでも事情は同じだが、そのレベルや額が大きく違う。そのためには、やはり、アイディアがものをいうのではないだろうか。最低限のインフラを整えるだけでも、そこそこのコストがかかるのだから、残りは、使い方のノウハウで、うまくやっていきたいものだ。



ウィンドウズ95に付属する「ブリーフケース」の画面例



メーリングリストの考え方

©1994-2007 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレス R&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.